塗装が施される前のボディ

#37「LEXUS TEAM KeePer TOM'S RC F」シリーズ2位!

SUPER GT 2014 総集編

スーパー GT 2014シリーズのGT500クラスは参戦車両の技術規定が変更となり、「車体」「エンジン」ともに新しい形でのスタートとなった。われらが「LEXUS TEAM KeePer TOM'S RC F」の37号車も「LEXUS RC F」をベース車両として2014年スーパーGT仕様にチューンナップされた。ドライバーは2013年と同様、伊藤大輔選手とアンドレア・カルダレッリ選手のペアにステアリングを託す。

4/5・6　第1戦　岡山国際サーキット

雨の試練に耐え、初戦を勝利で飾る!!

予選Q1に、伊藤選手がコースレコードを塗り替えるタイムを叩き出してトップに！Q2を担当したカルダレッリ選手はタイヤを温めることに失敗したものの、5番手から決勝レースをスタートした。
6日の決勝、スタートが近づいてくると青空を徐々に雲が覆いはじめた。スタートドライバーはカルダレッリ選手。早々に順位を5番手から3番手まで上げる。
しかし、神は試練を与える。雨だ。無情にも路面を濡らす。「KeePer TOM'S RC F」が装着しているタイヤはスリックタイヤ（排水用の溝のないタイヤ）での走行。レインタイヤ（排水用に溝が彫られている）に交換するチームもあったが「KeePer TOM'S RC F」は雨の試練に耐え、35周目まで粘る。雨は上がり、カルダレッリ選手はピットに飛び込み、規定となる伊藤選手にドライビングをチェンジすると、タイヤ交換と給油を済ませコースへ。順位は2位。前を走るのは同じLEXUS勢の6号車。レース終盤まで6号車との接戦は続き、6号車を捕らえることに成功、そのままチェッカーを受けた。37号車は新シャーシー、新エンジンによる新時代のSUPER GT開幕戦を制し、LEXUS RC Fのデビューウインを果たした。

YouTube で検索　KeePer 2014 開幕戦

5/3・4　第2戦　富士スピードウェイ

40Kgものハンディキャップウエイトを搭載し、決死の走行！

SUPER GTは優勝車の独占を避けるため、開幕戦を制した37号車「KeePer TOM'S RC F」は40kgものハンディキャップウエイトが搭載される。それでも予選のQ1は伊藤選手の頑張りでQ2進出。Q2はカルダレッリ選手が担当するが、電気系のトラブルに見舞われ、8番手に。4日、富士の霊峰を背景にスタート。燃料量からすると途中2回の給油が必要となる。そのことから伊藤→カルダレッリ→伊藤という順でドライビングを組み立てる。第1スティントで伊藤選手は3位、カルダレッリ選手は順位をキープしたまま最終スティントの伊藤選手にバトンタッチ。コースに復帰したときは6位、1台をパスして5位でチェッカーを受けた。

5/31・6/1　第3戦　オートポリス

ハンディキャップを背負いつつ、LEXUS勢トップでゴール！

50kgの重さを施した場合に相当する燃料流量リストリクターの径を絞ることで、エンジンの出力が抑えられた他、2kgのウエイトを積んでの出場。エンジン出力が抑えられ、アクセルを踏んでもスピードが得られない。これはレーシングカーにとって致命的なハンディキャップとなる。しかしながらQ1を担当した伊藤選手は3番手でQ2のカルダレッリ選手にバトンを繋ぐ。5番手から決勝レースをスタート。決勝日、スタートドライバーはカルダレッリ選手。レースは淡々と進み、伊藤選手に交代後、僚友である36号車「PETRONAS TOM'S RC F」と接戦を繰り返しながらも4位でチェッカーを受けた。表彰台はGT-R勢に独占はされたもののハンディキャップを背負いながらもLEXUS勢トップでゴールし、シリーズ得点を34ポイントまで伸ばした。

7/19・20　第4戦　スポーツランドSUGO

雨に翻弄されながらも、粘りの走行でポイントリーダーに返り咲き！

ハンディキャップウエイト68kgで臨んだ第4戦。予選は雨交じりの霧が深く立ち込め、公式練習走行はできたものの翌日に延期。20日、25分間だけの予選で伊藤選手がステアリングを握り5番手ポジションを獲得。同日、スタートを切ると同時に雨が降り出し、路面を見る間に濡らしていく。
「このままスリックタイヤでコースに留まるべきか、ピットに入れてスリックタイヤからレインタイヤに替えるべきか」。全チーム、上を下への大騒ぎ。スタートして1周した時点で次々にタイヤ交換のためピットにマシンがピットロードに殺到。
しかし37号車「KeePer TOM'S RC F」はスリックタイヤのままコース上を走り続ける。38周目、スリックタイヤで走行のままカルダレッリ選手から伊藤選手にバトンタッチ。伊藤選手も新しいスリックタイヤに替えてコースに復帰。踏ん張り切り、見事2位でチェッカーを受け、シリーズ得点を15ポイント重ね49ポイントとしてポイントリーダーに返り咲いた。

8/9・10　第5戦　富士スピードウェイ

ハンディの重さにノックアウト、ポイントリーダーの座は譲らず

ハンディキャップウエイト98kgはさすがにLEXUS RC Fの持つポテンシャルを抑えつける。"日本一長い直線コース(1.8km)を持つサーキット"でも明らかに直線スピードの違いが分るほどアクセルを踏んでも、踏んでもスピードは上がらない。結局、予選Q1でノックアウト。決勝レースは14番手からのスタートを強いられることとなった。10日は終日、雨。雨量が多いためセーフティカーに先導されてのスタート。スタートドライバーはカルダレッリ選手。徐々に順位は上げていくものの、雨が激しくなったために途中でセーフティカーが入り、順位の大きな変動はない。伊藤選手は12位でバトンを受けると順位を9位まで上げるもののそれ以上には至らず、チェッカーを受けた。2ポイントを加えてシリーズ得点51ポイントとしてポイントリーダーの座は譲らなかった。

8/30・31　第6戦　鈴鹿サーキット

ハンディと長距離、ペナルティに苦戦

このレースはシリーズで最も長い1000kmという距離で争われる。ハンディキャップウエイトは規則最大の100kgとなるために容易にQ2進出とはならず、予選13番手と苦戦。長い距離であることからピットイン回数を4回とする作戦で臨む。決勝、徐々に順位は上げつつも3スティント目にGT300クラスと接触し、痛恨のドライブスルーペナルティを受けてしまうが、再び順位を盛り返して7位となった。

10/4・5　第7戦 CHANG INTERNATIONAL CIRCUIT

タイヤ無交換作戦で13位から4位に浮上!!

第7戦からは、いままでのハンディキャップウエイトとは異なり、第7戦はシリーズ得点×1kgのハンディキャップウエイトとなり、第8戦はノーハンディキャップウエイトとなる。
それでも58kgのハンディキャップウエイトを背負わなければならず、全車条件的には同じといえども苦しい戦いになることには変わりはない。13番手とQ1を通過することはできない。
5日の決勝。新設サーキット特有の未熟な路面は滑りやすく、コースアウトするマシンも多く見受けられ、ブレーキング技が見どころとなる。その中で順位を維持しつつもタイヤを労りながら走行を続ける。速さが目立たない37号車「KeePer TOM'S RC F」は38周終了時点でドライバー交替のためのピットインを行う。何とチームは"タイヤ無交換作戦"で挑んでいた。コースに復帰した伊藤選手はここでトップに躍り出る。この暑いタイでタイヤ無交換ということは常識的には考えられない"ギャンブル"にも等しい作戦でもある。暑さはタイヤに負担をかけていたのか順位を4番手まで下げざるを得なかったが、そのままチェッカーを受けた。

11/15・16　第8戦(最終戦) ツインリンクもてぎ

最後まで諦めない・・・怒濤の追い上げでシリーズランキング2位!

優勝すればシリーズチャンピオンが獲れるという意気込みで臨んだ最終戦。この大会はハンディキャップウエイトはなし。開幕戦同様"ガチ"の勝負だ。
何と予選でブレーキトラブルが発生してしまい、痛恨のスピンを喫する。Q2への進出は適わず予選13番手に沈んだ。
しかしドライバーもチームも"チャンピオン獲得"を誰も諦めず、最終戦のスタート。その気迫は走りに顕れ、20周目のピットインでは4位まで順位を上げていた。素早いピット作業で伊藤選手は3位まで順位を上げてコースに復帰すると怒涛の追い上げを見せて2位でチェッカーを受けた！しかし優勝することは適わず。僅か2ポイント差の79ポイントでシリーズランキング2位で幕を閉じた。

2014年の総括

あまりにも早く勝ちすぎた。『LEXUS RC Fデビューウイン』という快挙を成し遂げたものの、SUPER GT特有のハンディキャップウエイトの過酷さはシリーズ中盤から後半にかけて重く圧し掛かり、チームもドライバーをも苦しめることとなった。しかし、レースは勝負事である以上、「勝てるときに勝つ」というのが必須条件であり、全戦においてポイントを取りこぼすことなく積み重ねてきたことは大いに評価されるべきだ。
また、燃料流量リストリクター径が絞られた時のエンジン出力は、明らかにGT-R勢に劣っていたことを考えると、ハンディキャップウエイトへの今後の対策が必要。この対策こそ2015年度戴冠のための条件となる。

RC Fの広告に「LEXUS TEAM KeePer TOM'S RC F」が掲載

#37「LEXUS TEAM KeePer TOM'S RC F」は、その健闘をたたえられ、11月21日（金）の日経新聞にLEXUS RC Fの全面広告で紹介された。